

う、といふ考へで、帰国したのであつた。

戦のことで心一ぱいであつた吾々はピル君のことを思ひだす機会を全然持たなかつた。然るに突然、ルクリユ老から報告があつた(當時老は独国境に近いところで働いて居り、私は反対にスペインに近いドルドオニ河畔のルクリユ家に居つた)。それによると、ピル君は世の有様にいたく失望して、巴里の裏街の一陋屋で自殺したといふ。

それは戦争が既に三年目になつた時であつた。彼が生計に窮したであらうことも察せられるが、聯合軍に勝算の見へなかつたことも亦彼が絶望の大原因をなした。

今少し辛抱して居たら、彼もポーランド独立の幸福な日の光を仰ぐことが出来たであらうに、と平和の来た時につくづく思はれたのであつた。同じく日露戦争に日本に来た同じピルスツスキイでも、一方は新立ポーランドの祖父と仰がれ、元帥となり、大統領となつたのに、他方は哀れな淋しい死方をしたのだ。まことに運命は無慈悲なものだ。

だが元帥ピルスツスキイが今日まで生きてゐたら、どんな悲しい思ひをしたであらう? ヒトラーの軍に、そしてソ聯軍に、前から後から挾撃されて、見じめな敗北を喫した昨今のポーランドを見たならば、老ピル元帥は恐らく憤死したであらう。それを思へば、先きの大戦の時に自殺したアイヌ学者の方が或は幸福であつたかも知れない。

今、憐れむべきポーランドの運命を思ふにつけ、あの純樸そのものゝやうなピルスツスキイ君の悲しい運命が思ひ出されて私は無量の感慨の禁じ得ないものがある。

支那の知友達

国民党の元老、李石曾氏が最近重慶を脱出したと噂される。彼は今度の事変が勃発してから支那の特使の資格で、ずっとヨーロッパに行つてゐた筈で、昨年帰つて香港に居住したやうに私は思つてゐた。然るに突然、重慶脱出の報に接して、何時の間に重慶に入ったのか、とその点を寧ろ驚いたほどであつた。

李石曾は蔡元培と並んで国民党では汪兆銘や蔣介石よりは先輩の方である。私はヨーロッパ放浪の際に李石曾、褚民誼の諸氏と知合になつたが、それは私がその以前に日本にて多くの支那革命家と親交があつたことが因縁になつてゐる。

汪兆銘などよりは、大先輩であつた章炳麟、黄興、宋教仁などが東京にゐて、革命雑誌『民報』を出してゐた明治三十八九年頃から四十二年頃にかけて私は可なり頻繁に彼等と往復した。黄興や宋教仁は随分金に困つて質屋の世話なぞ頼まれたことを覚えてゐる。章は当時既に学者として支那知識社会に盛名を馳せてゐた人であるが、自分が主筆である『民報』の筆禍によつて東京地方裁判所の法

廷に被告となつた。私はその時、付添人格で法廷に出たが、章が非常に変わった性質の持主で、何かに熱中してゐると、自分の帯の解けたのも知らずに人の前に出あるくといふ風な人物なので、弁護士は章の無罪の条件として、その精神異状を鑑定に附したいと主張した。付添の私はそれを章のために非常に気の毒に思つたので、弁護士に対してその申請は止めてくれと言つた。弁護士君は大に憤慨したと見えて、そのまゝ席を蹴つて法廷から去つて了つた。

この裁判事件の時に、も一つの思ひ出がある。それはその時余りに多くの支那留學生が押寄せて来たので、臨監の警部が廊下の鉄門を鎖して傍聴者を制限しようとした。するとその学生群が騒ぎだして、どうにも納まらない。私はその時警部君に言つた「お前さんが、そこをどいて、こちらに委せれば、すぐに静まるが」。警部君も素直に「では頼む」と言ふ。そこで私は革命党の先輩である黄興に耳うちして取り鎮めさせた。予期しなかつた群衆なので少数の警官達は困つてゐた折柄とて大へんに喜んだ。その時青年学生の中に汪兆銘もゐた。

汪兆銘もその頃は二十歳前後で白面の美少年であつた。併し民報社なぞで彼が何かに興奮して議論してゐた様などを今日思ひ出して、感慨尽きぬものがある。

明治四十三年、私が二度目の獄中生活を終へて久しぶりに民報社を訪問した時、何天炯、汪兆銘なども、そこに居たと思ふが、その時章炳麟は一書を認めて当時獄中にゐた幸徳に届けてくれと頼むのであつた。私はそれを引受けては来たが、併しそれは幸徳の手に届けるには余りに遅かつた。

私は大正二年三月一日に日本を脱走した。その旅費を出してくれたのが、支那革命少女のT〔鄭毓秀〕君であつた。それは後になつて知つたことで、直接に一切の世話をしてくれたのは当時横浜にいた白耳義の領事G〔ゴベル〕君であつた。大正元年、支那では第一期革命が勃発し、黄興等の軍は武漢を占領して、やがて長江一帯を風靡し、孫文も上海に乗込んで革命政府が成立したが、その時河南に居た袁世凱は清朝の起用するところとなり、革命軍との中間に介して、うまく政權を横取して自ら大總統になつて了つた。一旦大總統に就任した孫逸仙も元帥になつた黄興も失脚せざるを得なくなつた。かうした袁の老獪を憎んで、その暗殺を企てたのがT少女であつた。それが発覚して身邊に危険の迫つた時、之を助けたのが当時天津にゐたG領事君であつた。



支那の知友達

このG君、T君等の助けによつて、私は日本脱走の難事もできたのであるが、その当時発売禁止になつた私の『西洋社会運動史』の支那語訳が企てられ、丁度密かに日本に来てゐた孫文が、それに序文を書いてくれることになつた。孫文に会いに行つた時、戴天仇も一緒だったが、談話の時は席を去つた。孫文は私の脱走計画を聞いて、いたく感動したらしく、すぐ執筆も快諾するし、固い握手をして無事を祈つてくれた。

私の乗つた仏船ポール・ルカといふ新巨船は三月五日に上海に着いた。その翌日私は黄興を其寓に訪ふた。その時のことが拙著『放浪八年記』に出てゐるから摘録しよう。「某君—宮崎民蔵氏—を訪ひ、俱に馬車を連ねて中国社会党本部に行つた。折悪しく其主動者江亢虎君が不在で、四五名の本部長と挨拶して其処を辞し、江君の居住を訪うた。矢張り留守であつた。其れから中華民國の建設者黄興君を訪ふ。幸いに在宅といふので応接間に通された。邸宅の宏荘、応接間の華美、日本の大臣や元老の住居も是に及ばぬものがあらうと思はれた。『これは亦破壊の必要が出来ました』と同伴者某君に談笑すれば、同君は苦笑してゐた。やがて出て来たのは黄君に非ずして、農商務総長の宋教仁君であつた。宋君は丁度北京から来て居たのだ。次で黄君も出て来て互に久闊を叙して、四方山の話が出た。……訪問の所用も済んで、兩人とも玄関まで送つて呉れ、宋君は自ら僕の外套を取つて後から被せて呉れる。……其夜は上海に一泊、翌朝旅宿に江君が来訪して、支那社会党の状況を談られた。」

ところが、私が上海を去つて一週間もたないうちに、宋教仁は暗殺された。私はそれをポオト・サイドの英字新聞で知つた。勿論袁世凱の手先にやられたのであらう。



私はマルセイユに上陸し、ベルギーのブルツセルに到着して間もなく、再び驚くべき事実の報道に接した。それは例のT女史が袁世凱暗殺計画の露頭により、捕へられて死刑に処せられたといふ日本の『朝日新聞』の記事である。私は驚いてその事を直ちにニューヨークに転任したG領事君に報じた。G君は私の服を助けたことが発覚して、その転任を余儀なくされたのであらう。ニューヨークで私の手紙を見たG君は、大使の許可も得ずに、一本の手紙を書き置いた儘、直ちに乗船して白耳義に帰つた。突然私の下宿に姿を現したG君の顔を見た時は私も驚いた。併し、それよりも驚いたのは、直ぐにこれからT女史の為に袁世凱に復讐に行かう、と息せきながら声涙ともに下るのを見た時である。ははアと私も合点して、「よし承知した、併し周到な準備が必要だ」と私は答へた。

それから私は巴里にあるT女史の友人に書を送つた。すぐに五人ばかりの青年が私の狭い借間にやつて来た。そして手分けして支那に行く旅費の調達に着手することになった。その時、初めて褚民誼君（今日汪と共に新中央政府を建てつゝある）に会つた。

その時褚民誼君は他の青年達とは少し異なり、革命家風のところは少なくて呑気な学生であつた。褚はまた巴里から来たのでなく、予てからベルギーに住んでゐたので、私は彼と随分親しく交際した。併し彼は思想的のタイプでなく、鷹揚な実業家的の人物であつたので、思想問題に就ては余り多くを談つたことは無かつた。今日汪兆銘の秘書長として働くのは、両者の妻君達が姉妹なるが故に、よきコムビになつた訳であらうが、汪の女房役としては最も適任であらう。円満で平淡で思慮に富み、健康もすぐれてゐるので、総ての条件を備へてゐる訳だ。

さて、さうかうしてゐる内に、広東のT女史自身からの電報で「漸く虎口を逃れた、これからヨーロッパに向つて出発する」との知らせがあつた。北京乗込は無用となり、私はまたブルツセルを食いつめて倫敦に放浪し、半年ばかりして再びブルツセルに帰つた。私は漸く職業にありついたので、大

空を仰いで腹一ぱいの呼吸が出来る様になつたと思ふと、間もなくあの歐洲大戦だ。それから独軍占領の恐ろしいブルツセル市に六ヶ月間籠城して後、フランスに落ち延びたのは一九一五年の春だつた。

巴里北方二十五六里のリアンクールといふ小都会に、或る大学教授の家の留守番として、私は呑気な生活を与へられた。独軍が一度占領したところではあり、その時も尚ほ戒厳地帯であり、毎日砲声は絶えないし、独軍の空襲隊はいつも私の家の上を通過するし、仏軍は終始滞留するし、決して平静だとは言へないが、私のやうな放浪者には至つて呑気な生活であつた。そこへあの李石曾君がフランスの先輩ルクリュ氏と訪ねて来てくれた。実はこの家を紹介してくれたのもルクリュ君であつただ。

◇

李石曾は知識的青年革命家を養成するのに非常に大きな役割を演じた。彼は巴里で豆腐の製造を試み、それが支那のチーズとして一時巴里の流行になつたので、幾万かの金を儲け、その金で支那の活字と印刷機を購つて、立派な革命雑誌『新世紀』の発刊を引受けた。袁世凱が清朝を棄て、共和政を建つべく決心したのも全く彼の勧告によるのだと言はれる。彼の父は袁世凱なぞの大先輩たる李鴻章であるから、彼の言は相当に力があつたのであらう。その李石曾の『新世紀』が知識青年に非常な感化を與へたことは、種々な点で想像ができる。

私はフランスに七八年滞在中、可なり多くの支那青年に会つてゐるが、殆んどその名前を忘れてゐる。汪兆銘もフランスに来てゐると聞いたが遂に会ふ機会がなかつた。丁女史は私が倫敦にゐる時、尋ねて来てくれたが、その後バリのソルボンヌ大学で法学博士になつたといふ新聞記事を見ただけで遂に会ふ機会が無かつた。

今から十年前に、私は上海・江湾の労働大学に招かれて一ヶ月間講義したことがあるが、その時も、李石曾は、そこへ訪ねて来てくれた。その当時汪兆銘と李石曾とは思想を異にしてゐた。ブルドンやルクリュの思想の流れを汲む李石曾は分治合作の主張者であつたが、汪兆銘は寧ろ共產党に同情を持つて中央集権を主張するのであつた。労働大学には随分多くの有為な青年が孜孜として勉強してゐて、実に頼もしいと思つてゐたが、其後、蔣介石のために多くは虐殺されて了つた。

それから、あの満洲事変が勃発して、それが上海に飛火した時、私の一ヶ月間滞在し、宿泊した江湾の労働大学はその戦争のために、無残な破壊を蒙つた。見る影も無い、而も見覚えのあるフアサードだけの残骸を新聞写真で見た時は、私も言ひ知れぬ淋しさを感じざるを得なかつた。一千人近くの学生が居たと思ふが、彼等はよく熱心に私の講義を聴いてくれた。日本軍の進出の前に、彼等は既に蔣介石の迫害によつて此処から逸散して、学校は遺骸も同様であつたといふ。

満洲事変の直後、私は北京を訪問して三ヶ月ほど滞在した。その時も、李石曾君は、どこから聞いたか私の宿所に訪ねて来てくれた。そして、その時も彼は分治合作でなければ支那は治まらない、と言つてゐた。彼は当時、北支の教育界を風靡・独裁してゐたが、その以前、張学良を満洲から北京に

連れ出した当時は、その威勢は飛ぶ鳥も落すといはれる位であつた。然るに満洲事変で張学良は失脚するし、彼の声望も衰へたと言はれたが、併しそれでも教育界の大御所として彼は尚ほ光つてゐた。

彼は其門下に命じて仏国の碩学エリゼ・ルクリュの大著『地人論』を翻訳せしむべく三年間仏国に滞在せしめ、同書の編纂者にしてエリゼの相続者であるポール・ルクリュ氏の許にあつて親しく教を受けつゝ翻訳を完成せしめた。私も同書の翻訳を思ひたち、第一巻を東京で出版したが、後が続かなかつた。ルクリュは李石曾の門下生に、「自分のところでは翻訳のことは分らないから、石川のところやつた方がよろしからう」と言つたらしいが、その青年はまた日本語が解らないので、長らく生活したフランスで仕事することになつたのだ。愈々翻訳が完成し、上海でその第一巻が出版され、それを私のところに送つて、同時に、「同書は東洋に關係する部分が足りないから、支那の部分は呉稚暉に書かせる、日本の部分は貴下に頼む」と言うて来た。それに対して私は返書を書かずに、ぐづぐづしてゐると、今度の日支事変が勃発してしまつた。

呉稚暉は今も重慶の方に居るらしいが、彼は李石曾と思想を同じくして自由な分治合作を主張して蔣介石や汪兆銘とは傾向を異にしてゐた。呉は蔡元培と同じく章炳麟の流れを汲み、一種の復古主義を唱へた所謂「光復会」に属するもので、黄興等とも出発点を異にした。黄興や宋教仁は、最初華興会といふ団体を湖南省に興して民主主義革命を鼓吹し、章や蔡や呉と異つて、実行的であつた。日本に来ては章炳麟が主筆となり宋教仁が編輯主任となつて『民報』を出し、青年汪兆銘はその下で編輯の任に當つてゐた。黄興は東行の方の総大将といふところであつた。彼は日本の大西郷の崇拜者で態

加那利島まで行つて西郷の墓に詣つたほどである。

呉稚暉・蔡元培・李石曾の三人は思想的系統に属するが、その中で李は最も政治的才能を持つてゐると言へるであらう。十年前に江湾の労働大学を訪ねて来てくれた際に私は彼に「政治は駄目だから、教育に専心したら、どうだ」と言つたところ、「イヤ政治によつて少しでも世の中が善くなれば可いではないか」といふ答へであつた。彼は今日尚ほ善い政治で何とか世界を盛りかへす心算であらうか、会つて話して見たい気がする。

◇

私は支那の大学教授連中に随分多くの知人を持つてゐるが、今、何処にあるか、さつぱり消息が分らない。昨年〔昭和十二年〕の秋、雲南の二友人から送られた書翰に、雲南には目下支那全国から集まつた十余の大学があり、青年学徒が非常に元気で勉強してゐると書いてあつた。雲南に行つたら或は多くの旧友に会へるかも知れない。

先達でニュース映画を見ると、汪兆銘の演説があり、その傍に禿頭の大入道が一人坐を占めてゐた。それが曾ての青年、褚民誼であつたのには一驚を喫した。私も入れて、五六人の友達が一しよに撮つた当時の写真なぞ取り出して見て、私はあの當時を思ひ出す。

前に上海で会つた江亢虎君は、私の渡欧後に米國に行つたらしかつた。米國からパンフレットを送つてくれたことを覚えてゐる。そして非常にエドワード・カーペンターに心酔してゐるらしかつた。

私が日本脱走前に『哲人カアベンター』といふ一書を著はし、其後もカ翁訪問記などを日本の新聞に出したので、彼もそれに刺戟されて初めてカ翁に心を傾けるに至つたらしかつた。

昨年暮に江亢虎は東京に来て、帝国ホテルに泊つてゐたらしかつた。私は久々で訪問したかつたのであるが、彼は今度の汪兆銘等の政治運動に合流する意向らしく言ひ伝へられるし、それでは私の様なものの訪問があつては都合がわるからうと思つて遠慮した。支那に於て社会党の名を明白にかざして運動を開始したのは蓋し彼を以て嚆矢とするであらう。彼が今日も、「国家社会党」を標榜して變らないのは、支那にては珍らしいことだ。



今日十余の大学が雲南に集まつて必死になつて青年学徒の養成に努力してゐると言はれる。それが日本のために決して都合のよいものでないことは容易に想像し得る。是等の大学が、如何なる態度で如何なることを教授してゐるか私は知らない。併しその中には少くとも蔣介石や李・呉・蔡やの思想が鼓吹されるであらうことは想像し得る。

近衛公は禍を子孫に遺さない為にこの支那問題を徹底的に解決せねばならぬと言つた。尤もな話である。

それは日本の知識者に負はされた大きな重荷である。支那の知識者も同様の責任を負ふべきではあるが、併し日本の知識者に特に重荷となつて負はされて来る問題である。若し日本の知識者がこの難

問題を解決し、この重荷を背負ひきれぬならば、東洋は悲惨なる修羅場と化するであらう。

その解決には吾々自身が先づ第一に支那人の地位になつて事を考へねばならぬ。第二に支那の自然と支那の歴史とを考察すべきである。私はこの二点に於て日本の識者達の為に悲しむとともに、支那の友人達の為に同様に悲しく思ふ。日本人が身を支那人の地位に置いて思慮し得ないのは無理もないこととするが、併しそれが不可能ならば百の説法も千の慈善も何の役にも立つまい。この点は併し支那の友人達に対しても言へる、彼等は余りに支那の民衆と離れた生活と感情とを持つてゐて、民衆支那を感じ得ないのである。

第二に支那の自然は人間に対して余りに大きい。今日までの支那の歴史が物語るところは、人間が自然に迷はされた歴史である。印度の自然力は強烈であるが、支那の自然は広大である。支那人は自然に執着したが、印度人は自然から解脱しようとした。支那は自然を厭悪せずしてこれを崇拜した。支那の歴史が残酷な優勝劣敗の事実に充ちてゐるのは自然崇拜から由来してゐる。支那の大義名分は優勝の大義名分である。易姓革命などといふ御都合主義の理論が矢張りそれである。一種の自然哲学たる易経が、支那の重要な經典となつてゐるのもそれである。ところが、この思想がまた日本にも大きな感化を与へてゐる。

吾々は——支那の友も吾々も——共同の責任として此思想を改革しなくてはならない。今は実にその好機会である。今日の不幸な日支紛争を解決して後世子孫の為に禍を転じて福たらしむる道は、ここにありはしないか。併しそれを単なる思想問題としてのみ考へたのではこの事業は達成されない。

それは支那の自然生活そのものに大革命を齎らしてこそ初めて成就し得るところである。そこに新しい科学的の技術が必要になつて来る。

若し私に、支那の友人達と親しく交渉するの自由が許されるならば、私はかうした心組で此事業に身を捧げたいと思ふ。これは元より非常な難事業である。これは単なる日支関係調整の為のみではなく、東洋復興、歴史転回の上に必須欠くべからざる事業であると信ずるのである。それは超政治の精神的事業であり、先づ政治を離脱したものののみが為し得る事業である。